



Kaisho SATOYAMA Forum

第1回 人と自然の共生国際フォーラム

自然の叡智を再考する
～里山から学ぶ持続可能な社会づくり～

報告書 (概要版)



主催／人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

〈愛知県・瀬戸市・国際連合地域開発センター・愛知県国際交流協会・中日新聞社・名古屋大学・大学コンソーシアムせと・海上の森の会・NPO法人才の木〉
後援／総務省・環境省・経済産業省・農林水産省・地球産業文化研究所・中部経済連合会・名古屋商工会議所・国際協力機構（JICA）中部
愛知県森林協会・愛知県緑化推進委員会・愛知県農林公社・愛知県自然観察指導員連絡協議会・森林インストラクター会“愛”

第1回人と自然の共生国際フォーラム 開催報告

平成19年11月24日(土)、25日(日)に「第1回人と自然の共生国際フォーラム」が愛知県立大学講堂(愛知県長久手町)にて行われ、総勢約500名の方々の参加がありました。

「自然の叡智を再考する～里山から学ぶ持続可能な社会づくり～」をテーマに、人と自然の関わりを学び、愛知万博の理念や成果を、「海上の森」から全国へ、「愛知県」から世界へ発信し、人と自然が共生する持続可能な世界づくりに向けた大きな潮流を創り出すことを目的に開催されました。

テーマ：自然の叡智を再考する ～里山から学ぶ持続可能な社会づくり～

日時：平成19年11月24日(土)～25日(日)

プログラム

11/24(土)

開会式 ————— 13:00～13:30

基調講演① ————— 13:30～14:30

世界の生態系の現状と里山との関連

アルフォンス カンブー



開会のことば

永田 清
(愛知県農林水産部長)

基調講演② ————— 14:30～15:30

石油がなくなる日

加藤尚武



主催者あいさつ

神田 真秋
(愛知県知事)

課題提起・意見交換 ————— 15:45～17:00

里山の哲学の可能性

～人と自然の豊かな関係を再生するために～

鬼頭秀一



マリ クリスティーヌ
(あいち海上の森センター
名誉センター長)

交流会 ————— 17:30～19:30

11/25(日)

パネルディスカッション ————— 9:30～11:30

里山から学ぶ持続可能な社会

コーディネーター 川井秀一

パネリスト

木村光伸

岩槻邦男

佐藤洋一郎

宮浦富保



来賓祝辞

加藤 精重
(愛知県議会副議長)

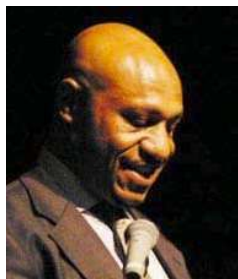
現地見学会 ————— 12:40～15:30



小林 五十六
(中部森林管理局
名古屋事務所長)

基調講演 1

世界の生態系の現状と里山との関連



アルフォンス カンブー
(Alphonse Kambu)

国籍:パプア・ニューギニア
国際連合大学高等研究所
いしかわ国際協力研究機構所長
専門領域:環境法政・都市研究

生態系が私たちに与えてくれる4つのサービス

2001年から2005年にかけて95カ国・1360人の自然科学、社会科学の専門家が活動に参加し、およそ50年前までさかのぼってミレニアム生態系評価(略してMA)を行いました。

私たち人間は生態系から「供給サービス」「調整サービス」「基盤サービス」「文化的サービス」の4つの大きなサービスを提供してもらっています。供給サービスは飲料用や食料を作るための水、家を建てる木、燃料となる木材など生活する上で不可欠なものを指します。調整サービスは気候の調節、洪水の制御、疾病の制御、水の増加などの機能、基盤サービスは土壌の生成や栄養の循環など私たちの基本的な生活の基盤となっているものです。そして4つ目の文化的サービスは、生態系が私たちに提供する神秘的、精神的、教育的、レクリエーションの機能のことです。

生態系の変化が私たちの福利にもマイナス影響を与える

MAは4つの論点を述べました。一つ目は環境変化の速度と規模についてであり、過去50年間、土地利用の変化、生物種の移入、資源の過剰消費、環境汚染などにより著しく変化したという結果がでました。1700年から1850年の150年間よりも、1950年以降の30年間の方が広い土地が耕地に転換され、過去数十年間で世界中のサンゴ礁は20%、マングローブは35%が失われました。さらに、ほ乳類、鳥類、両生類の10から30%が絶滅の危機に瀕しているのです。

二つ目は、環境変化が生態系サービスや人間の福利に与える影響についてです。私たちは生態系の損失を引き起こしながら利益を得てきました。1960年以降、人口は2倍、経済活動は6倍、食糧生産は2.5倍、パルプ用木材供給は3倍に増大しています。

三つ目は今後50年の見通しについてであり、今のペースでは生態系や生態系サービスは非常に悪化すると出ました。そして最後の四つ目が、生態系サービスの悪化を逆転させるための取り組みです。日本では60年代から70年代にかけての環境公害を抑制するため、さまざまな政策や法律が多くつくられました。MAにあるいくつかのシナリオもその通りに

京都議定書の交渉、生物多様性保全条約など多方面にわたって多くの国際政策過程に参加しており、ミレニアム生態系評価の政策対応に関する報告書の作成にも執筆者として参加している。

学歴 千葉大学法経学部法学科卒業(法学士)
千葉大学法経学部社会科学研究所(法学専攻)修了(法学修士)
千葉大学法経学部社会文化科学研究科(現代都市論環境科専攻)修了(学術博士・法学)
東京経営短期大学非常勤講師
国際自然保護連合(IUCN)・フォード財団研究員(在ワシントン)
日本学術振興会・国連大学高等研究所博士修了
経歴 研究員(在東京・横浜)いしかわ国際協力研究機構所長

いけば、生態系の悪化を止める試みは達成できるでしょう。

内外の要因を受けて、日本の里山は放棄されている

環境省の報告によると、日本には里山地域というのは4割ぐらいいるとされています。その里山にも4つの生態系サービスがあるのですが、高齢化による農業、林業の労力の低下や海外から安い野菜や木材が入ってくることにより、里山の経済的価値や活動が低下し、管理放棄という問題が起きています。

里山を放棄した結果、自給率が低下し、地域経済に大きな影響を与えていきます。また、生物多様性の損失につながり、さらに食文化や伝統的知識など、生態系サービスの一つである文化的サービスも失われていきます。

里山の価値を高めるために何をすべきか

こうした状況を防ぐため、私たちに何ができるかと考えると、大きなテーマとして経済的な措置が必要だと言えます。里山の中に入ってみると、いろんな価値ある資源がありますが、それが発展していません。ですから価値を復活させていくことが重要な対策となってきます。

それから、現在いろんな活動がなされていますが、政策、また計画のレベルで様々な組織、企業、NGOが力を合わせて共同で仕事をしていく必要があると言われています。そして、個人のレベルでもいろいろできます。私たちの生活の中で取り組んでいかなければならないことも多くあるでしょう。



基調講演 2

石油がなくなる日



講師 **加藤 尚武**
(かとう ひさたけ)

京都大学名誉教授
前鳥取環境大学学長・哲学者
専門領域: 生命倫理学・環境倫理学

石油はあと40年で、鉄はあと19年で枯渇する

最近、石油価格が高騰し、食糧も金属も値上がりしています。燃料の枯渇よりも金属の枯渇の方が早く到来すると言われ、石油はあと40年で、鉄はあと19年で無くなるとされています。エネルギー不足を補うため、食糧がエネルギーに転用されるようになりました。新聞記事によると菜種の世界の生産量が4800万トンで、10年後はEUのバイオディーゼルだけで4400万トンの菜種が必要になるそうです。トウモロコシは、すでに30%が燃料として使われています。

穀物が燃料として必要ならたくさん作ればいいと考えられますが、穀物は増産できない理由があります。作付け面積を増やすには森林を減らさなければなりません、森林を減らしていいという人は誰もいません。さらに水供給の限界があります。1トンの穀物を作るために1000トンの水が必要というデータがあり、穀物の増産には水の増産が伴わなければならない、今後、温暖化が進めば水事情は今よりもっと悪くなります。

持続可能性とは何か、その答を里山に見る

大きな歴史的展望を見ると、一人当たりの穀物生産高のピークが342kgで1984年でした。埋蔵石油の発見のピークは1964年。世界の人口増加は、ある予測では2050年に94億人に達してピークを迎えると言われていますが、まだあと30億人増えるというのはかなりの重荷です。12億人が1日1ドルで暮らし、11億人が清潔な水を利用できず、8億人が栄養不足になると試算され、貧富の差はますます拡大していくことになります。

そうなった時、私たちが今の産業社会や生活水準を維持するために、環境学では「持続可能性」を重要視するようになってきました。

土壌、水、森林、魚などの再生できる資源の持続可能な利用速度は、再生速度を超えてはならないという提言があります。魚を捕獲する時は、繁殖速度をオーバーしないようにすれば持続可能です。また、環境汚染と浄化についても、汚染物質は環境が無害化できるスピードを超えてはならない、とされています。そういう生活体系の模範となっていたのが、

日本の環境倫理学、応用倫理学の第一人者。研究者として哲学、倫理学会をリードするほか、環境倫理学の立場から地球温暖化など環境問題について、マスコミや講演などで説得力ある発言を続けている。科学技術にも関心が強く、医療、生命倫理などの問題についても積極的な言論活動を展開している。

実は里山だったのではないかと思います。

枯渇型資源への依存から脱却

それから持続可能性とは、枯渇型資源への依存から脱却するというでもあります。エネルギーは再生型資源に転換する、金属は循環型を使用する、さらに、廃棄物の累積の回避、生物種の絶滅回避を守ることで、人類は今の産業と自然界を維持しながら生存を続けることができると思います。

経済の仕組みも、補完的循環経済から完全循環経済への移行が課題となります。補完的循環経済とは、すでに私たちが経験しているリデュース、リユース、リサイクルと言われる仕組みですが、産業、供給、流通という動脈の流れと回収、再生、再利用化、廃棄という静脈の流れが別々の企業体によって維持され、全体として補完的な構造になっている形を意味します。完全循環経済は、生産、流通者が回収、再利用化、廃棄の責任を負います。動脈と静脈の流れが同一企業によって維持され、循環的な構造が作られるのです。

里山では昔からその仕組みが自然にできていました。里山型の資源消費と、現在私たちがやっている資源消費の問題から21世紀を展望したいと思います。



里山の哲学の可能性 人と自然の豊かな関係を再生するために



講師 **鬼頭 秀一**
(きとう しゅういち)
東京大学大学院
新領域創成科学研究科教授
専門領域:環境倫理学

人間が利用して生まれた二次的な自然

里山は、昔から人が暮らしている里と、奥山と言われる非日常的な場所、その間にあります。里はお米や野菜を作ったり、生業の場となり、奥山は修験道の人たちが修業したりなど、精神的な空間だと思います。

それに対して中間にある里山は、農用林という形で利用することがあると同時に、人々の「遊び仕事」や「遊び」の場として存在しました。まさに人が関わってきた自然だと思います。人為的ではあるものの、人間に都合の良いように作り変えてきたわけではありません。人間は伐採したり落ち葉を掃いたりなど、自然のシステムを利用して生活を営み、それに対して自然が適応して二次的な自然が生まれてきました。

人と自然との関わり方によって生物の多様性も生まれました。例えば農業用に造ったため池は生物多様性が非常に高く、稲作のために水路を造れば、そこにドジョウやフナ、カエル、水生昆虫が生息するようになりました。そういうものを私たちはどういうふうに関わりながら、後世に残していくのかというのが問題だと思うのです。

人間の自然への関わり方を考えることが大事

17～18世紀に近代科学や資本主義が出てきて自然を収奪し、産業革命によって自然を改変することが本格化すると、自然保護思想が生まれ、国立公園、サンクチュリアがつくられるようになりました。人間中心主義を反省し、人間非中心主義じゃなければならない、という議論が活発に行われました。

人間中心主義 対 人間非中心主義、いつも二つに分かれて議論されてきましたが、人と自然との関係は、中心に人間と自然のどちらを置くかということよりも、人間の自然に対する関わりをどう考えるかということが大事だと思います。人為を排することが自然保護ではなく、非常に不均一で変動の大きい生態系に対し、保全のために手を入れて管理する。マネジメントという形で関わることも必要かもしれません。

経済性よりも精神的な要素が強い「遊び仕事」

マイナー・サブシステムという不思議な営みがあります。

現場を歩きながら、環境の理念にかかわる問題を「環境倫理学」として形にしていく学問的試行を重ね、白神山地の保安全管理問題等、日本の自然の権利運動の理念化に取組み、社会学的な調査をもとに環境倫理的な議論を提起している。
近年では生物多様性保全や自然再生の現場で、生態学者と積極的な対話を行いつつ、人文社会科学的寄与のあり方を模索している。

著書に「自然保護を問わない」（ちくま新書）
「環境の豊かさをとめて」（昭和堂）
「自然再生のための生物多様性モニタリング」（東京大学出版会）などがある

副次的な生業で、それが無くても経済的に困らないような営みです。しかしそれは地域によってすごく大事な営みで、遊びと結びついている部分もあり、私はマイナー・サブシステムを「遊び仕事」と訳しました。経済的なことよりも精神的な要素が強く、海上の森の管理も遊び仕事だと思います。必要に迫られて管理をしているのではなく、楽しいからやっている。森林ボランティアも多分そうだと思います。

絶滅危惧種「川ガキ」を知っていますか？これは川で遊ぶ子供のこと。その復活が今、大きな課題となっています。それは環境をどうとらえて地域社会をデザインしていくかに関係しています。

人と自然との関係性は、実は物質的なものだけではなく、精神的なものも大事になってきます。そういうものを私たちがきちんと見直しながら、それを再生していく形で持続可能な社会の基礎を作っていく必要があり、それができるのが里山です。里山はずっと今まで持続可能な形でやってきた地域です。昔と同じやり方では無理で、新たな経済システムやハイテクを入れ、グローバルな持続可能性を実現できればよいと考えています。



パネルディスカッション

里山から学ぶ 持続可能な社会

コーディネーター

川井 秀一 京都大学生存圏研究所長
NPO法人の木の理事長
(かわい しゅういち) 専門領域: 林産科学・木質工学

日本木材学会会長、日本材科学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取り組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人の木の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。



パネリスト

木村 光伸 名古屋学院大学人間健康学部教授
海上の森の会会長
(きむら こうしん) 専門領域: 霊長類学、熱帯生態学、地域生態論

コロンビア・アマゾンの熱帯林調査や、霊長類の行動生態研究の他、人・文化と自然の相関、地域、進化史などをキーワードとした様々な調査研究を行っている。愛知万博検討会議委員、里山学びと交流の森検討会座長を務めるなど「海上の森」のあり方に対する理解者の一人であり、県民参加の組織である「海上の森の会」の会長を務める。



川井:まず初めにパネリストの先生方お一人ずつに、里山との関わりについてお伺いします。

木村:私はずっと海上の森の会に関わってきました。海上の森は周伊勢湾要素の植物が複数含まれる貴重な生態環境です。その自然を形成してきた歴史や生活がそこに埋もれており、それらを総体として守り、また再構成していける仕組みが要るのだと思います。

また、私たちの里山経験は日本独特のものであり、これを世界に発信して環境問題に資することを何かやろう、ということがよく言われます。そのためには日本的な歴史と現実を見直し、もう一回私たちと自然の関わりの特長をはっきりしておく必要があると思います。

私が生活してきたこともあるアマゾンでは原生林が破壊され、粗放な焼畑が行われ、あるいは木材が盗伐されるなどして自然がどんどん疲弊しています。人は豊かになるのではなくますます厳しい状況に追い込まれていく。しかし、アマゾンの森は決して太古の昔から存在していたものではなく、インディオたちが作ってきた森です。その思想を、今破壊している人たちの中に取り戻していかなければなりません。それはひょっとしたら、私たちが日本で苦労している里山とは何か、ということと同じなのかもしれないと感じます。

岩槻:日本の里山の特徴は、日本列島全体が人里、里山、奥山ときれいなゾーニングを作っていることです。これはユネ

パネリスト

岩槻 邦男 兵庫県立人と自然の博物館館長
専門領域: 植物分類学
(いわつき くにお)

兵庫県丹波市に生まれる。丹波の自然の中で幼少時代を送る。京都大学理学部植物学科卒、理学博士。京都大学教授、東京大学教授及び同付属植物園長を勤めた。現在、放送大学客員教授、ユネスコ国内委員。著書に「生命系—生物多様性の新しい考え」(岩波書店)「シダ植物の自然史」(東京大学出版会)などがある。日本学士院エジンバラ公賞を受賞。文化功労者。生涯学習にも関心が強い。



パネリスト

佐藤 洋一郎 総合地球環境学研究所教授
専門領域: 植物遺伝学
(さとう よういちろう)

京都大学大学院農学研究科修士課程修了。農学博士。国立遺伝学研究所助手、静岡大学農学部助教授を経て、現職。イネの起源や伝播について研究を行っており、著書に「稲のきた道」(裳華房)、「DNAが語る稲作文明—起源と展開」(NHKブックス)、「DNA考古学」(東洋書店)、「森と田んぼの危機(クライシス)—植物遺伝学の視点から」(朝日選書)などがある。



パネリスト

宮浦 富保 麗谷大学理工学部環境ソリューション工学科教授、
里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター長
(みやうら とみやす) 専門領域: 森林生態学、林木育種学

名古屋大学大学院農学研究科修士課程修了。農学博士。森林生態学および樹木の遺伝的特性についての研究のほか、「里山」について自然科学と人文・社会科学の側面から総合的に研究している。共著書に「里山学のすすめ」(昭和堂)がある。



スコガ、ある地域の生態系を保全するために1960年代に作ったコンセプトに合っています。保全すべきコアエリアを設け、そのエリアとトラディショナルなあるいはレジデンシャル地域との間にバッファゾーンを作るという考えです。

しかし日本の里山はもっと古くから存在し、地形や気候、そこで暮らす人の生活などから作り上げられてきました。今のようなゾーニングが列島を通じてほぼまとまったのは室町時代だといわれています。

日本列島の開発となると自然破壊が問題視されますが、里山は開発の結果です。ただし、ご先祖様たちは森林を伐採して農地を作った時、八百万の神々に申し訳ないという意識を持ち、氏神様を招来し、鎮守の森で覆ってきました。誰が指導したわけでもなく、日本列島を通じてそういう持続的な開発をしてきました。日本の典型的な奥山の自然は、それによって維持されてきたのです。

そういう歴史や文化が背景にあるため、人と自然の共生という考え方は日本人は感覚的に理解できます。しかし、英語にはなかなか訳せません。もともと欧米人の哲学には共生しようという概念がないからでしょうか。人と自然の共生とは何かを、私が一生懸命になって欧米人に日本的な意味を説明し、ようやくその考え方の大切さを理解してもらえることをしばしば経験します。

佐藤:私は農学出身ですが、ここ10年ほどの間、考古学者

たちと一緒に仕事をしてきました。遺跡から出てくる物を農学や生物学の立場で分析し、昔の人の食料や生活、さらにはどういう里を持っていたかを調べてきました。

そうした活動から出た一つの答が、里は人間の生活資材の生産場であったということです。里を構成する重要な要素は人間であり、人間が作る稲などの農作物であり、家畜、家禽などの生き物です。それから森に自生する動物や樹木などもそうです。そういうものを含めてトータルで里が形づくられているのです。

また、里は人の五感を形成した場所だと考えています。今の若い世代の精神的・情緒的不安定な状況は、里との乖離が原因であると考えたいと思います。

宮浦:龍谷大学は京都に本拠地を持ち、琵琶湖南岸の瀬田丘陵にもキャンパスがあります。その地域は、もともと里山として利用されていましたが、今はゴルフ場や図書館、公設市場、そして私が勤める龍谷大学が作られてきました。

龍谷大学はスポーツ施設を建設するためにアセスメントを行ったところ、里山の代表的な鳥であるオオタカが営巣しているのが発見されました。結局、キャンパス拡張計画を変更し、教育や研究、地域住民との関わりの中で大切にしようという動きが生まれ、研究プロジェクトを発足しました。

現在我々は、地域の人たちと連携してこの森をどう利用するか、いろいろな取り組みを考えています。地域の小学生に参加していただいて里山の歩道を整備したり、間伐を行ってシイタケを作ったり、落ち葉かきをして堆肥を作り、地域の人たちの家庭菜園で使っていただいたりなど、いろいろ取り組んでいます。この森を、地域の共生の核として利用できる方法を探ることで、里山学、地域共生学の確立を目指しています。

川井:岩槻先生は先ほど、歴史的な観点から日本の里山は固有なものだという論点がありましたが、もう少し詳しくお話しいただけますか。

岩槻:私が“日本的”を強調する理由は、里山が英語に訳せないことと、日本で里山という言葉が使われ始めたのは、その荒廃が進むようになってからだからです。明治以降、西欧的な物質エネルギー志向を取り入れたために、鎮守の森を守ってきた心の部分が失われてきました。人と自然が共生するためには、ご先祖様たちが伝統的に持っていた考え方をもう一度呼び戻してみる必要があるのではないのでしょうか。ただし、私は里山の日本的な特性を強調しているだけで、このような景観が日本にしかないと言っているわけではありません。

佐藤:確かに中国西端の砂漠にある遺跡を調査すると、3000年前に人が暮らしていた形跡が残っています。砂漠地帯ですら、3000年前は草地として里山のようなものがあったような気がします。ヨーロッパも今は里山のような感覚はありませんが、キリスト教が入る前に草地としての里山があったことはほぼ確かだと思います。里山という言葉やそれに代わる認識があったかどうか分かりません。よく調べてみると面白い研究テーマになりそうに思います。

川井:宮浦先生の地元との連携活動には、NPOやNGOなどの組織は加わっているのですか。

宮浦:NPOやNGO、それから大津市の職員の方にも入っていただいています。それから、里山を子供たちの環境学習の場として提供することも大事なことから、小学校、中学校と連携した取り組みも考えています。

木村:海上の森にも、行政や多くのNPOの方々が関わっています。しかし、真面目すぎて啓蒙活動の呪縛に陥っているのではと感じることがあります。もう少し遊びがあってもいいような気がします。私の学校にも小さな森があり、そこに子供たちを招きますが、彼らにとって一番いいのは放つたらしにすることだと思っています。

川井:循環、持続、共生などの思想を里山という言葉を通じて発信していこう、というのが今回のフォーラムに関わる大きなテーマになっていますが、それについて各先生から一言ずつコメントをいただきたいと思います。

岩槻:アジア的な発想を西欧化することでゴチャゴチャになってしまったのが、日本の130年の経験だったと思います。そこでもう一度日本的なものに立ち返るべきでしょう。今の地球を悪くしたのは、物質エネルギー志向の近代文明です。それに対するアンチテーゼを打ち立てるには、日本がこれまでの経験をもとに一番発信していかなければならないと思います。

佐藤:それともう一つ、今の日本は国土は荒れるに任せ、食べ物外国から買ってきてみんなメタボリックシンドロームで悩んでいるという、ものすごいことをやっています。やっぱり日本は、自分たちの里山をちゃんと生産の場として回復し、必要なものは自分たちでまかなうということを自ら示す、これもあわせて大事なことだと感じています。

宮浦:里が英語になりにくいというお話しがありましたが、私たちが昨年、オーストリアの研究者を招いてシンポジウムを開いた時、オーストリア・アルプスにも里山と呼べる景観があるということでした。彼は、風景そのものは違っても文化の多様性としての里山はあり、「SATOYAMA」は国際語として通用すると言っていました。

木村:先年、ポルトガルを訪れた時、あちらこちらで山火事が発生しているのにポルトガル人はみんな平気で「いつものことだ」と言っている。その後、山火事現場に行ってみると、ちゃんとコルクガシの林ができていて、植生としてすごく単純なものです。それが彼らの世界なんです。

そういう目でポルトガル、スペインのイベリア半島を見てきましたが、考えたらみんなバフファゾーンで、原生自然はありません。そういう世界で生きている人にとっての共生は、私たちとは違うだろうと思いました。

川井:ありがとうございます。本日はパネリストの方から多くの実践の例示をいただき、里山を通じて人と自然のあり方を考えてきました。これまでの持続、発展という一元的なやり方から、持続、循環を重視する共生に向けた社会づくりをめざすべきであるということ、フォーラムの最後のとりまとめとさせていただきます。

フォーラム宣言

この宣言は、第1回人と自然の共生国際フォーラムのまとめとして、
また海上の森から日本、あるいは世界に向けて発信するメッセージとして、
川井先生始め講演者、パネリスト4名で検討されたもので、
最後に川井先生から提案されました。
里山の多面的価値を見直し具体的な行動に結びつけていくことを約束するとして、
参加者一同の賛同を得ました。

第1回人と自然の共生国際フォーラム フォーラム宣言

○愛知万博を契機に海上の森は、自然が持つすばらしい仕組みを学ぶ場となり、人と自然が共生する社会の実現を目指す愛知万博の理念を象徴する森となった。

○私たちは、海上の森を見るとき、私たちの身近に自然とのふれあいの場があり、さらにこのフォーラムを通して、里山と呼ばれる人と自然が共生するシステムが生きていることの大切さを改めて認識した。

○地球の環境問題は既に危機的な状況にあり、人類の存続さえ危ぶまれる現状を認識し、第1回人と自然の共生国際フォーラムにおいて、以下のように宣言する。

①人の自然との関わりが端的に表れる里山の多面的価値を見直し、これを守り育てることが大切である。

②里山文化の継承が、開発・拡大から持続・循環を重視する「共生」への思想の転換の鍵である。

③今こそ、世界各地に存在する「里山的なシステム」とも言える人と自然との共生の技術・知恵・伝統・思想を持続可能なライフスタイル・社会づくりに生かし、現代社会に機能させることにより、この危機を克服することが必要である。

④今後、このことを広く発信し、自らが具体的な行動に結びつけていくことを約束する。

以上、第1回人と自然の共生国際フォーラムの宣言とする。

平成19年11月25日 人と自然の共生国際フォーラム参加者一同

閉会の言葉

人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

副委員長 伊藤 明(愛知県農林水産部農林基盤担当局長)

現地見学会



里山食文化パーティ(海上の森)
海上の里で餅つきや炊き出しなどにより、里の恵みや里山における食文化を体感しました。



あいち海上の森センター
あいち海上の森センターの本館にて、センターの取組みや役割について学びました。



愛・地球博記念公園(モリコロパーク)
モリコロパークの愛・地球博記念館など万博跡地の利用状況を確認し、万博の理念や成果を振り返りました。